広島芸術学会活動報告

平成二十八（二〇一六）年七月一日～平成二十九（二〇一七）年六月三十日

▼平成二十八年七月十五日付で「藝術研究2016」（年報第二十九号）を発行した。

▼平成二十八年七月十七日～十八日

サテライトキャンパスひろしま（大講義室五〇二）において平成二十八年度総会、続いてサテライトキャンパスひろしま（大講義室五〇二）およびホテルメルパルク広島（「桜」の間、「椿」の間）において第三十回大会を開催した。

総会は大島徹也事務局長の開会のことば、青木孝夫会長の挨拶の後、末永航を議長に選出し議事を進めた。第一号議案「平成二十七年度事業報告並びに決算について」について、資料にもとづき事業報告および決算報告が大島事務局長からなされ、続いて、総会に出席できなかった樋口聡監査および西原大輔監査に代わって末永議長から監査報告について説明があり、審議の結果、承認された。第二号議案「平成二十八年度事業計画並びに予算案について」について、資料にもとづき事業計画および予算案が大島事務局長から説明され、審議の結果、承認された。

第三号議案「委員選挙および平成二十八・二十九年度役員について」は、まず平成二十八年度はじめに実施された委員選挙の結果と会長・副会長の選任等について、大島事務局長から報告がなされた。選挙により選出された委員は青木孝夫、大島徹也、桑島秀樹、末永航、菅村亨、関村誠、谷藤史彦、馬場有里子、古谷可由、松田弘の十名で、これらの委員の互選により、青木孝夫が会長に、末永航が副会長に就任した。その後、会長が指名し総会による承認を必要とする委員五名には伊藤由紀子、柿木伸之、城市真理子、西原大輔、山下寿水、委員会が選出し総会による承認を必要とする監査二名には樋口聡、船田奇岑が選ばれたことが大島事務局長から報告され、審議の結果、承認された。また、会長が指名する幹事に下岡友加、福田道宏の二名、事務局長に大島徹也、事務局員に菅村亨が就任したことが大島事務局長から報告された。すべての議事審議が終了後、青木会長の挨拶があり、閉会した。参加者数は二十九名。

大会は、研究発表（四件）、創立三十周年記念座談会・祝賀会、シンポジウムを行った。

研究発表（七月十七日、於サテライトキャンパスひろしま）は、関村誠（広島市立大学教授）を総合司会とし、①吉本由江（長崎県美術館学芸員）「カタルーニャ・ムダルニズマの装飾家ガスパー・ホーマーの室内装飾」、②宮琳（東亜大学大学院博士後期課程）「一九六〇年代の日本語専攻精読教科書にみる中国の国家的教育思想―北京大学編『日語』所収の芸術テキストの分析を中心に―」、③横道仁志（奈良芸術短期大学非常勤講師）「なぜプラトンは悪しきミメーシスで語るのか――『国家』第一巻の分析を通しての詩人追放論の再解釈」、④坂口将史（九州大学大学院博士後期課程）「成田亨がキャラクターデザインにもたらしたもの」。参加者数は四十六名。

座談会（七月十七日、於ホテルメルパルク広島「桜」の間）は「広

島芸術学会の三十年の歩み―その回顧と展望―」をテーマとし、司会は青木孝夫（広島大学大学院教授）、パネリストは金田晉（広島大学名誉教授）、神林恒道（大阪大学名誉教授）、松田弘（呉市立美術館館長）、末永航（美術評論家）、袁葉（中国映画評論家・エッセイスト）の五名。参加者数は五十名。

祝賀会（七月十七日、於ホテルメルパルク広島「椿」の間）は末永航の司会のもと、四十名が参加した。

シンポジウム（七月十八日、於サテライトキャンパスひろしま）は「芸術と老年」をテーマとし、司会は桑島秀樹（広島大学大学院教授）、パネリストは青木孝夫、萱のり子（東京学芸大学教授）、城市真理子（広島市立大学准教授）、大石和久（北海学園大学教授）、末永航の五名。参加者数は五十九名。

▼平成二十八年八月二十四日

会報第一三九号を発行。巻頭言は桑島秀樹（広島大学大学院教授）の「小括・美学と人生――崇高・アイルランド・女たち――」。第三十回大会の研究発表の報告は、①吉本由江の発表について末永航（美術評論家）、②宮琳の発表について鄭子路（広島大学大学院総合科学研究科博士課程後期）、③横道仁志の発表について濱下昌宏（神戸女学院大学名誉教授）、④坂口将史の発表について谷藤史彦（ふくやま美術館学芸課長）が執筆した。また、座談会の報告は大石和久（北海学園大学教授）が、シンポジウムの報告は西原大輔（広島大学大学院教授・詩人）が執筆した。

▼平成二十八年九月十八日

第一一六回例会として、呉市立美術館の特別展「マンガとアニメで見る こうの史代『この世界の片隅に』展」を鑑賞し、「この世界の片隅に」を支援する呉・広島の会メンバーによる関連トークイベント（於呉市立美術館地階講座室）を聴講した。参加者数は九名。

▼平成二十八年十一月十九日

会報第一四〇号を発行。巻頭言は福田道宏（広島女学院大学准教授）の「見つからなくて困るもの」。また、松本侑子（呉市立美術館学芸員）による第一一六回例会の報告、袁葉（広島大学非常勤講師・エッセイスト）によるエッセイ「秋高気爽」を掲載した。

▼平成二十八年十二月十七日

サテライトキャンパスひろしま（中講義室六〇四）において、第一一七回例会を開催した。研究発表は①下岡友加（広島大学大学院准教授）の「戦後台湾の日本語文学―黄霊芝「自選百句」の方法―」、②渡辺千尋（呉市立美術館学芸員）の「ピエール・ボナール作《桟敷席》に関する一考察―ベルネーム＝ジュヌ画廊との関わりを中心に―」。参加者数は二十七名。

▼平成二十九年二月二十一日～二十六日

芸術展示第十回展「不在の存在論」を開催した。広島県立美術館県民ギャラリーとギャラリーG（広島市中区上八丁堀四－一公開空地内）を会場とし、会期は同一。詳細は別掲の山下寿水（広島県立美術館学芸員／同展企画担当者）による報告のとおり。

▼平成二十九年二月二十三日

会報第一四一号を発行。巻頭言は大島徹也（広島大学大学院准教授）の「広島のアートめぐり」。第一一七回例会の研究発表の報告は、①下岡友加の発表について西原大輔（広島大学大学院教授）が、②渡辺千尋の発表について谷藤史彦（ふくやま美術館副館長）が執筆した。

▼平成二十九年三月十八日

広島大学（東広島キャンパス）学生プラザ多目的室一・二において、第一一八回例会を開催した。二部構成の形式をとり、第一部では兼内伸之介（広島大学大学院総合科学研究科博士課程後期）による研究発表「日本人形とそれを取り巻く環境―近代日本における人形認識の一断面―」を行った。第二部では、新しい試みとして批評会を行った。「谷藤史彦『ルチオ・フォンタナとイタリア二〇世紀美術』（中央公論美術出版）を読む」と題し、まず同書著者の谷藤史彦（ふくやま美術館副館長）が同書の概要を説明した。続いて大島徹也（広島大学大学院准教授）が同書に対する批評を行い、最後に参加者を交えて全体討論を行った。参加者数は三十二名。

▼平成二十九年四月二十五日

会報第一四二号を発行。巻頭言は伊藤由紀子（インディペンデント・キュレーター）の「一九八〇年代の広島のアートシーンを思い出すままに―」。第一一八回例会の報告は、第一部の兼内伸之介の研究発表について赤坂由梨子（広島大学大学院総合科学研究科博士課程前期）が、第二部の批評会「谷藤史彦『ルチオ・フォンタナとイタリア二〇世紀美術』（中央公論美術出版）を読む」について松田弘（呉市立美術館館長）が執筆した。また、芸術展示第十回展「不在の存在論」の報告として、山下寿水（広島県立美術館学芸員／同展企画担当者）による「広島芸術学会芸術展示 第十回展『不在の存在論』を終えて」を掲載した。

▼平成二十九年五月二十七日

第一一九回例会を開催した。この例会は「新しくオープンした『神勝寺 禅と庭のミュージアム』見学」と題して、谷藤史彦（ふくやま美術館副館長）の案内のもと「神勝寺 禅と庭のミュージアム」（福山市）を見学した。白隠の禅画・墨蹟等が展示されている同施設内の荘厳堂では、城市真理子（広島市立大学准教授）が白隠についての解説も行った。参加者数は十五名。

▼平成二十九年六月十九日

会報第一四三号を発行。平成二十九年度総会・第三十一回大会のスケジュール、研究発表要旨、シンポジウムの案内を掲載した。第一一九回例会の報告は、山本和毅（香取会計事務所学芸員）が執筆した。

◆会員の受賞等

・桑島秀樹（広島大学大学院教授）第十四回木村重信民族藝術学会賞を受賞。

◆会員状況

平成二十九年六月三十日現在、法人会員二法人、個人会員二百八名（一般会員百五十二名、学生会員五十六名）

※文中、敬称を略させていただきました。また、肩書きは当時のものです。

事務局